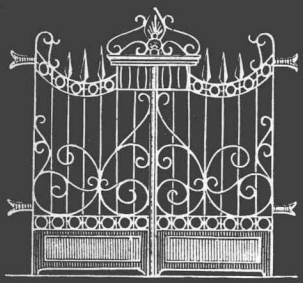
弱い結婚

小島信夫

弱い結婚

小島信夫



講談社

小島信夫　大正4年岐阜生れ。
東大英文科卒。明大工学部教授。
昭和29年「アメリカン・スクール」
で芥川賞、40年「抱擁家族」で谷崎
潤一郎賞を受賞。他の主著に「島」
「女流」「実感女性論」など。

弱い結婚

昭和41年4月25日　第1刷発行

定　価　430円
著　者　小島信夫
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽町3－19
電話　東京（942）1111（大代表）
振替　東京3930
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　有限会社大光堂

© Nobuo Kojima 1966
Printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえします。

目次

四十代　7
郷里の言葉　61
女の帽子　87
自慢話　113
十字街頭　133
返照　167
弱い結婚　197
あとがき　281

造本　伊藤　積

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

小島信夫作品集

弱い結婚

四十代

第一の控

教員の溜り場である控室でタバコをふかしていると、三十二になる助教授のM君がやってきた。その顔を見ただけで、何か不機嫌であることが分った。十何年つきあっているので、この人の心の中の様子がこちらにもうつるが、彼も、表情に出さないではいられない正直なお人好しだ。

「野原さん、まだ家を建てるんですって」

「ああ」

と私はいった。

「それは、ひどいなあ。いうなりにならないで、少し、しっかりした方がいいんじゃないかな」

私はムッとした。私も彼とおなじように不機嫌になった。不機嫌な顔を向きあわせていな

ければならないのは、たまらない。
「だってまだ二年前じゃないですか、この前増築したのは」
「ああ、そうだよ」
私はM君が私に会ったら意見するつもりで覚悟をきめていたのにちがいないと思った。
「僕はKさんからきいたんですが、心配していましたよ。ちょっとひどすぎるんじゃないかって」
「ひどすぎる？　そうか、K君がそういったか。僕にもそういったよ。仕方がないな」
「あんた、どうかしてしまうんじゃないですか」
「どうかしてしまうかも分らない。しかし、もともと僕がいいだしたことで、家内とはかんけいがなかったことだ」
「それはそうだけど、しかしまた何百万といるんでしょう」
私はだまっていた。MがKにあって私たち夫婦のことを話題にして、こういっただろう。
「あの人弱っているんですよ。僕の名前で僅か五万や十万の金を借りて、それが僕の月給から差引かれる。それをあの人が僕に払うというぐあいなんですからね。あの人、尻にしかれすぎるんじゃないのかな。たった二月前に、あの人、学校の前の往来でうずくまっていて僕が通りかかったら、家内に電話をかけてくれ、といったんですよ」
Kが何といったか分らない。Kは私の学生時代からの友人で、十数年前田舎から東京へ引越してくるとき、一万円借りた。そのときKは「僕には貸す金はないから兄貴から借りてや

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ろう。その代り兄貴に会ってくれ」といった。
Kの兄は顔見知りであった。彼はいった。
「一万円なんてものは僅かなもんですよ。しかし、あたしは商人ですからね。ちゃんと利子をとるし期日には弟から請求させますよ」
Kがわざと商人の兄に借りさせたのは、将来、私との交友をダメにしない心づかいからだ。彼は私が分割で返済するたびに、帳面をひらいて記入した。そのKから私は三度の増築の度に金を借りて、それを返した。三度目の金はやっと返したところだ。
私が三度目の金を返しに行ったとき、今の家を売ってこんどの新築をする話をした。そして予算が大へんに超過してしまうので困るが、家内が首をタテにふらないのだ、といった。
Kはかたい表情をして、
「それはいけないな、それはいけないな」
と二度つづけていった。「いけない」というのは「お前の女房がいけない」という意味とつづいて「だから、お前たち夫婦がいけない」という意味と、つづいて「だから、夫のお前がいけない」という意味を含んでいた。
「それはいけないよ。商人が金を投資するのとワケが違うんだから。商人の場合だって先だって僕は親セキの男が僕の兄弟に金を二百万借りにきたがね。僕らは株を売って五十万ずつ百五十万だけ貸してやった。ところがだよ。とっても不服そうな顔をしてるんだ。何をいってやがるんでえ、と思ったがね。その人は分裂症になってなおったが、すっかり無気力にな

ってるんだ。可哀想ではあるがね。だいたい、百万とか百五十万とかカンタンに借りられると思っているのがまちがいなんだ。一口に百万といったって僕らの場合には並大抵の金じゃないんだ。君だって、じみな小説を書いているんだからな」

「それはそうだよ、きみのいう通りだよ」

私はKを尊敬している。さあというときに、ハッキリしたことがいえる。しかしこんなふうに、ハッキリ感じられないようになってきた。

Mは私に世話になったこともある男だから、私の身を思っていっている。それなのに私は妻の味方をしたい。

私はたしか二月ほど前に、往来で歩けなくなった。歩けないというわけではないが、歩いていると車をよけることがメンドくさくなっているので危いと思った。するとふいにもう歩く気持がなくなってしまった。そこへMがやってきた。私は妻に電話をするように頼んだ。

「電話をしてどうするのですか。呼ぶのですか」

とMはいった。

「帰るのなら、帰れるよ。だが電話をしてくれればいいんだ。僕がこうだといってくれればいいんだ」

私はMに連れられて医務室へ行った。そこで鎮静剤をもらった。一服のむと五分たたぬうちに私をおびやかしていた、大きなフトンみたいな厚い層がとれてしまった。Mにそのことを伝えると、彼は私をじっと見つめて、まだ目を放さなかった。彼は私の後輩である。

Mは控室でそれだけいうと、忙がしいので、そそくさと去って行った。彼が何だか、私に対して、「いやあな気分」になっていることが分る。

それは病人に対する態度といったらいいかもしれない。いや、そうではあるまい。人間が「いや」になり、彼も自分のことがいくぶん心配になってきたのであり、その相手の私を、よけい「いや」に思ったのだろう。

M君もKさんも、私とおなじ大学に勤めているが科がちがう。N君は、直接私と同じところで働いている。彼は私の新築のことを知っているが、

「そうですか、大変ですね」

というだけであるが、たえず鋭い眼つきをしていて、そういうときはきまって右肩がこっている。三十六になる。

「もうしゃくにさわって、しゃくにさわって」

ときり出す。私もたくさんの「しゃくにさわって」いる人をこのごろ知っているが、この人は全身でそうなのだ。

「家を出るときに、ああいけない、と思うともうどなりつけているんです。すると、肩がこりはじめるんです。いや肩がこっているので、おこっているのか、しれないのです。今日など、こんな状態で、とても授業が苦しいですね。学生にいわなくともいい皮肉をいってしまいますからね」

「奥さんとは、うまくいっているのですか」

「あるときから僕のいう通りに動くようにさせてしまったんですが、その代り、いわないことや注文しないことはしませんよ」
大きな身体だ。ボートの選手をしていた人だ。
「家内が立ってきりきりと動いているときはいいのです」
ところが彼のところへ、寝るためにやってくる姿を見ただけで、肩がこりはじめるというのだ。
「その原因というのは何かあるのですか」
「原因ですか。それはありますね。そいつが何年も僕の中に巣くっているのかもしれませんね。いや、そういえばそうかもしれない。しかし、それは闇の中を手さぐりするようなもので……でも、そうだな。あれだな。あのためだな」
とおこりはじめる。
「直接にホンヤクの仕事などして過労なのですよ」
「そうかもしれないです」
Nはそこで考えこみながらいう。
「こんなことで、これからどうして行くのかと、そう思うとまた……」
私はサンドウィッチをさしだして、食わないか、という。妻がこんなものをこさえて持たせてよこすのはよっぽどのことである。珍しいことなのだ、といいながら差し出すのだが、彼はほほばりながら、鋭い眼をしてサンドウィッチを眺め、

「僕の家でも、サンドウィッチは、作れといえば、作りますが、作れといわなきゃ、やらないのですよ」
数日前も別れ話をしたといって話しだした。話しているうちに「しゃくにさわる」が何度もあらわれてくる。Nの妻は子供を連れて出て行ってくれ、家は私にとっておいてくれ、といったという。
「よくもそういうことが、いえる。僕ならとてもそんなことはいえない。ウソにでもそうでないことをいう、とこう、しゃくにさわって……二日もたつと、やつは知らん顔をして笑っているんですからね」
私は、原因は彼の妻にあるのか、彼にあるのか分らないと思った。
Nはいう。
「肩のこりだけは何とかなおしたいですね。苦しくって」
私はうなずいた。
「うまい人だったら、指圧のようなものが一番いいのですがね」
「近所に評判のいい人がいるんです。ところが一週間前から頼んでおかないとやってくれないんです。満員だそうです」
とNはいった。
あれとよく似ていると私は帰り途で思った。いつか映画で見た話の筋だ。ミンクの外套を盗み出して女にあたえた男がある。彼は監獄に入るが、女は面会にもやってこない。この男

に同情する観客はあんまりいない。つまり、しっかりしていないからだ。KもMもこの映画を見た場合の私と似た気持なのだろう。

こういうときがある。夫婦がくたびれてしまって顔をつき合わせれば、争いになるし、いなければ気になって、よその者に悪口を洩す。どっちも相手のために動いたり、考えたりするのが、オックウになってくる。

この四月のある日、私は自分の口から、二階を上げて、私の仕事部屋のとなりに、ちゃんとした寝室を作り、バラ色の夢をもう一度まきちらしたいと思った。もう一度？　いや、これが初めてなのだ。私の家は度々引越したり、増築、改築をし、文壇の片隅にいるくせに、ときどき週刊誌の噂に立ったりすることもあり、現にまた、私が見もしない週刊誌を他人が読んで、「もう引越しをされたのですか」ときかれることがある。しかし、私は今までバラ色の夢をもったことはほとんどない。

二年前私がテレビの音をのがれるために、妻や子供が安心して夜のある時間テレビを見ることが出来るようにするために、私はとうとう私の部屋を奥へうつし密閉してしまった。そのついでに家の中はこわされて徹底的に改造されてしまった。台所も風呂も洗面所も便所も前より近代的になり便利になり明るくなった。

私は密閉し防音にし、小さなルーム・クーラーを月賦でとりつけた。しかし、私はこの部屋を出て、家の中のほかの部屋へ入って行くとき、自分が別世界からあらわれて何か妨害をしにやってきたように見えることに気がつきはじめた。出て行くときの、私の歩きかた、物

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.